

北米の天台学

—一九九三年度 A A R 学会に参加して—

ロバート・F・ローズ

昨年（一九九三年）十一月二十日から二十三日まで、アメリカの首都、ワシントン D・C のシェラトン・ホテルで、American Academy of Religion（アメリカ宗教学学会、以下 A A R と略称する）の年次大会が行なわれた。毎年この学会では多くの仏教関係の発表が行なわれているが、驚いたことに、一九九三年度の大会では天台関係のパネルが二つも設けられていた。アメリカの学会で、天台仏教がこれほど大きく取り上げられたことは、かつてなかったことである。私は長いあいだ天台思想を中心に仏教を研究してきたので、興奮を抑えきれないままワシントンに飛び、A A R に参加した。以下、この二つの天台のパネルを中心に、A A R の仏教関係の発表について報告したい。

一

さて A A R は、一九〇九年に発足したアメリカ最大の宗教学分野の学会である。その年次大会も大規模なもので、一九九三

年の大会では二二七のパネルが設けられ、宗教についてあらゆる方面からの研究発表が行なわれた。また例年の通り、同時に同じ会場にて、アメリカの聖書文学学会 (Society of Biblical Literature)；この学会でも二〇〇以上のパネルが設定されていた）も行なわれ、学会期間中シェラトン・ホテルの界限は多くの宗教学者でこった返した。

発足当初 A A R は主としてキリスト教の研究が中心であったが、それ以外の宗教の研究もアメリカで盛んになるにつれて、それらを研究する学者も年次大会で発表を行なうようになった。同時に学会の機関紙である *Journal of the American Academy of Religion* でも、世界各地の宗教についての論文を多く掲載するようになった。現在学会はキリスト教史・ユダヤ教史・イスラム学・比較宗教学・宗教哲学・倫理・宗教と女性・教育と宗教学などの二八の sections、アフリカ宗教・日本宗教・中国宗教・アメリカ黒人宗教・神秘主義・宗教儀礼研究・シユライエルマッハー研究など四五の groups、儒教研究・ヒマラヤ／チベット宗教研究・カトリック研究など一四の consultations、そして商業倫理など四の seminars というように、九一の部会に分けられている。仏教 section も、一九八〇年代後半頃から活発になり、今では毎年の大会で七八ほどの仏教関係のパネルが設けられている。今年の仏教 section のパネルは次のようなものであった。

1. The Rebirth Doctrine and Buddhist Practice in Asia (アジアにおける輪廻思想と仏教の実践) Chair: John

Makransky (Boston College)

2. Topics in Buddhist Studies (仏教研究の諸問題)

Chair: Janet Gyatso (Amherst College)

3. New Voices in Buddhist Studies (仏教研究における新しき声) Chair: Jacqueline I. Stone (Princeton University)

4. A Discussion of Malcolm David Eckel's *To See the Buddha: A Philosopher's Quest for the Meaning of Emptiness*

(ヤマト・ユキタケ・マクナル博士の『仏陀を見よ』について) 一哲学者による空の意味の探求』について座談会) Chair: Collett Cox (University of Washington)

5. Teaching Zen in the Classroom: Major Approaches (禅を教室で教えるための主な方法) Chair: Miriam Levering (University of Tennessee)

またこれとは別に、他の部会(例えば日本宗教・中国宗教・南アジア宗教の section など)でも仏教関係の発表を多く聴くことができ、例えば仏教 section と日本宗教 group が協賛して開催した“Critical Buddhism: Issues and Responses to a New Methodological Movement”のパネルでは、駒沢大学の袴谷憲昭教授や松本史郎教授によって最近提唱されている「批判仏教」が取り上げられ、かなりの反響を得ていた。しかしこれらのパネルについての報告は別の機会に譲り、ここでは特に、私の最も関心を惹いた二つのパネル、つまり、Living Words: Scriptural Transformation and Meaning in Tiantai (生きた言葉—天台における経典の変革と意味)と題された中国天台

について「パネル」Innate Enlightenment (*Hongaku*) In

Japanese History: A Re-examination (日本の歴史における本覚思想の再評価)と名づけられた日本天台と本覚思想に関するパネルについて報告し、それらを通して、北米における天台学の現状を垣間見て行きたいと思う。

## 二

初めに Living Words: Scriptural Transformation and Meaning in Tiantai のパネルは仏教 section と中国宗教 group が共同で開いたものであった。「生きた言葉—天台における経典の変革と意味」という題から伺えるように、このパネルでは、天台教学が中国の各時代において、いかにその時代的要求に答えつつ変化していったか、ということにスポットを当てて研究発表が行なわれた。このパネルは、次のようなメンバーで構成されていた。

Chairperson: Stanley Weinstein (Yale University)

Paul Swanson (Nanzan Institute for Religion and Culture):

“Say What? Chih-is Use (and Abuse) of Scripture” (天台智顛における経典の利用と乱用)

Linda Penkower (University of Pittsburg): “Making and Remaking Tradition: Chan-jan and the Tang T'ien-tai Agenda” (伝統の作成と再編—湛然と唐代天台の課題)

Daniel Getz (Bradley University): “The Tiantai Vision: Reclamation and Reorientation in Siming Zhili (960-1028)”

(天台のビジョン—四明知礼におけるその回復と新しい方向付け)

Daniel B. Stevenson (University of Kansas): "Ritual Text, Tradition and Performance in Sung 'T'ien-t'ai'" (宋代天台宗における儀礼のテキスト・伝統・執行)

Respondent (応答者): David W. Chappell (University of Hawaii)

それぞれの発表は、皆大変興味深いものであり、教えられる所が多かった。まず第一に、ポール・スワンソン博士は、以前本校で天台学を学ばれたこともあって、我々には大変親しい方である。教授は現在名古屋の南山大学宗教文化研究所の研究者であるが、天台の三諦説を研究した彼の *Foundations of T'ien-T'ai Philosophy: The Flowering of the Two Truths Theory in Chinese Buddhism* は、海外では高く評価されている。今学会の発表で、スワンソン教授は『摩訶止観』や『法華玄義』に見られる経典からの引用をいくつか取り上げ、それらの引用文は原典とは違った形で引用されていることを指摘し、智顛がどのような意図で経文を変えて引用したのかという問題について考察された。次にピッツバーグ大学のリンダ・ペンカー教授は、長年中国の仏性論、特に湛然の仏性論を研究テーマとされているが、今回の発表では湛然の『金剛錍論』を取り上げ、その中で湛然がいかに自らの主張している草木成仏説を涅槃經などの経典を依り処として実証しようとしたか(つまり、いかに涅槃經などの経典を草木成仏説の立場から解釈し、自ら

の立場を実証しようとしたか)という問題を取り上げられた。

さらにブラッドレイ大学のダニエル・ゲッツ教授はつい最近ドクター論文をユール大学に提出したばかりの研究者であるが、かつて台湾で中国哲学の学位を取得したほどの中国通である。彼は宋代の四明知礼と、宋代の天台宗内部で巻き起こった山家・山外の論争を取り上げ、知礼がこの論争を通じて天台教学を自らのビジョンに基いて再解釈し、再編成した過程について論じた。最後にカンザス大学のダニエル・スチーブンソン教授は『摩訶止観』、特に四種三昧の研究として知られているが(彼の四種三昧についての論文: "The Four Kinds of Samadhi in Early 'T'ien-t'ai Buddhism" はゴーター・グレンツリー [Peter Gregory] 教授によって編集された論文集 *Traditions of Meditation in Chinese Buddhism* 『中国における瞑想の伝統』一九八六年出版)の中に収められている)、最近では『摩訶止観』の部分的英訳とその研究をニール・ドナー (Neal Donner) 教授と共に出版されている (*The Great Calming and Contemplation: A Study and Annotated Translation of the First Chapter of Chih-t's Mo-ho chih-wan*, University of Hawaii Press, 1993)。今学会でのスチーブンソン教授の発表は教授の従来からの天台儀礼の関心を反映しているようであるが、その中で教授は知礼や遵式などによって宋代に盛んに作られた儀式用のテキスト(例えば遵式の『金光明懺法補助儀』や知礼の『千手眼大悲心呪行法』など六つのテキストが挙げられている)を検討し、これらはすべて天台智顛に由来する『法華三

『味儼儀』に基づいて作成されたものであることを明らかにした。以上のように、AARの中国天台のバネルの発表者とその発表内容を極く簡単に紹介したが、これらに共通する課題は、天台教学がいかに各時代の要請に応じて変化して行ったか、ということを説明することにあったように思われた。先にも述べたように、この課題はバネルのテーマにも反映されている。この点は、特にベンカワー教授とゲッツ教授に強調されていた。ベンカワー教授によると、伝統的な天台教学の中では、天台思想は均質(homogeneous)なものであると考えられて、それは智顛・湛然・知礼を通じて一貫しており、時代が変わっても本質的には変化していない、とされてきた。この場合、湛然や知礼の書物は主として智顛の思想を理解する手引書として用いられるのが常であった。しかし湛然や知礼は智顛とは異なる環境で、異なる課題をもって思索を行なったのであるから、この三者の思想の間に大きな隔りがあって当然である。そして湛然は智顛を、そして知礼は智顛と湛然を、それぞれ依り処としながらも自らの課題に立ち、それらの先人の思想を時代に応じるように再編成して行ったのであった。今日近代的文献学的方法論が中国仏教の研究に導入されて、かなり状況は変化しているが、それでも伝統的な静的(非歴史的)天台教学史へのアプローチは完全に消え去ったとはいえない。今後、天台教学を研究するに当り、その思想のダイナミックな面により層一注目しなければならぬ、と教授は指摘した。

さらにゲッツ教授の発表でも同じ点が強調されていた。彼は

自らの研究の歩みを振り返り、天台学を学び始めて最初に出会った天台教学の概説書(例えば諦観の『天台四教儀』、佐々木憲徳教授の『天台教学』、福田堯頼教授の『天台学概論』、安藤俊雄教授の『天台学』、yuh-jin Leon Hurvitz 教授の *Chih-t*)は皆、天台思想を図式的に解説し、それをあたかも単一で固定されたものように扱っていたと、語った。しかし、天台教学は統一性を保ちつつ、常に変化している有機体のようなものである。ゲッツ教授は知礼を例にあげて、さらに詳しく説明されたのであるが、教授の見解からすると、知礼は従来の天台の伝統を重んじながら、彼自身の天台についてのビジョンに基づき、天台教学を改造したのであった。勿論、知礼自身は意図的に天台の伝統教学を造り直そうとした訳ではない。彼はあくまでも、智顛以来の正統な天台教学を護持しようという意識をもっていたのであろう。しかし知礼が正当な天台教学と認めたものは、実は彼自身の天台のビジョンに他ならないのである。いかなる時代においても伝統を受容することは、権威あるテキストと解釈する主体の間のダイナミックな相互作用によってのみ可能である。知礼の場合も(実は同じことが智顛や湛然の場合でもいえるが)伝統を尊重しつつ、彼独自の天台のビジョンにより、時代にマッチした天台教学を生み出そうと努力したのであった。そこで、結論としてゲッツ教授は、天台教学が、いかなる歴史的・地域的・宗派的(派閥的)・制度的条件により影響され、変って行ったかを具体的に究明することが今後の天台研究の最も重要な課題の一つであると述べた。

さてこのように、パネルの発表の多くは、天台教学の一貫性を認めつつも、どちらかといえば、智顛・湛然・知礼などが天台の伝統にそれぞれ重要な改革をもたらした点に注目しているといえよう。フューラーが『言葉と物』を著して以来、米国の学会では思想上の不連続性についての関心が高まり、このパネルの発表も、間接的ではあるが、その影響を受けているように思える。それはともあれ、すべてのペーパーのレベルは高く、また智顛・湛然・知礼という、中国天台の最も重要な人物とその思想がすべて紹介されており、パネルとしては非常に充実したものであった。このパネルの発表を聴きながら、アメリカの中国天台研究が新たな時代に入ったと実感した。四人のパネルの今後の研究に多いに期待する。

### 三

次に日本天台の本覚思想を取り上げた Innate Enlightenment (*Hongaku*) In Japanese History: A Re-examination について触れたい。実はこのパネルは、AARの仏教 section ではなく、日本宗教 group のパネルの一つとして設けられたものであった。しかし聴衆のほとんどが仏教に関心のある研究者で占められていたことはいままでもない。

このパネルのメンバーとその発表題目は次のようであった。  
Chairperson: Ruben F. Habito (Southern Methodist University)  
Paul Groner (University of Virginia): "Taking Teachings

on Innate Enlightenment Seriously: Reading the *Kanjo Ruiju*" (本覚思想の積極的評価―『漢光類聚』を讀む)

Fumihiko Sueki 末木文美士 (University of Tokyo): "Two Contradictory Aspects in the Teachings of Innate Enlightenment in Medieval Japan" (中世日本の本覚思想における二つの矛盾的側面)

Jaqueline I. Stone (Princeton University): "Philosophical Climaxes and Moral Quagmires: Reconsidering Assumptions in the Study of Tendai *Hongaku* Thought" (哲学的極致と道徳的泥沼―天台本覚思想研究の前提再考)

Respondents (応答者): Kenji Matsuo 松尾剛次 (Yamagata University) and Masatoshi Nagatomi (Harvard University)

率直にいわせて頂くと、中国天台のパネルと比べると、この本覚思想のパネルは、それほど充実していなかったように見受けられた。個々の発表は皆大変興味深いものであったが、パネル全体としては焦点を欠き、私の期待に反して、本覚思想研究の課題や全体像を明確に示してくれるものではなかった。日本から本覚思想について深い理解を持つ東京大学の末木文美士教授と、日本中世史を専攻されている山形大学の松尾剛次教授の応援を受けて、このパネルはある程度の成功を収めることができたが、残念ながら、本覚思想研究(広くいえば日本天台そのものの研究)の機は未だアメリカでは完全に熟してはいないように感じられた。

パネル全体としては不満がいくつか残ったが、先に述べたよ

うに個々のペーパーはすべて興味深いものであった。パーズニア大学のポール・グローナー教授は日本の仏教学によく通じた緻密な文献学者であり、最澄に関する優れた研究の著者として知られている (Saicho: *The Establishment of the Japanese Tendai Sect*, Berkeley Buddhist Studies Series, 1984)。今回の発表でグローナー教授は天台本覚思想の重要な文献の一つである『漢光類聚』を取り上げ、その思想的・歴史的背景について考察し、このテキストに関する問題点をいくつか指摘した。末木教授は『三十四箇事書』について詳しく、かつ明解な発表を行ない、好評を得た。しかし私にとって最も刺激を与えてくれたのは、日蓮の研究者として知られるプリンストン大学のジャッキー・ストーン教授のペーパーであった。ストーン教授は従来本覚思想は実践の必要を否定した無批判的な世界肯定論と位置づけられ、それは天台宗の墮落を招いたものとして常に評価されており、さらに鎌倉新仏教の各宗派は天台本覚思想を否定することのより生じたともされて来たことを指摘された。しかし、もし本覚思想がそのように墮落した思想であったのであれば、なぜそれが六百年もの間天台宗の中で支配的な位置にあったのであろうか。ストーン教授の見解によると、本覚思想の墮落した、実践無視のイメージは、鎌倉新仏教の各宗派の優位を主張するのに都合のよいものであるから、広く浸透していったのである。当時の天台宗は、腐敗した面も多く持っていたが、決してそれだけでなく、独創的な新思想を生み出す活力をも十分持っていた。そこでストーン教授は、天台本覚思想を天台

宗の墮落の根源とする見解を改め、本覚思想と天台宗史におけるその積極的役割を再検討する必要があると論じられた。

#### 四

以上のように一九九三年の AAR における天台教学に関する二つのパネルについて、簡単に報告してきたが、最後に私が学会に出席して感じたことを二点ほど述べて終りたい。第一に、従来天台仏教は禅などと比べてアメリカの学会ではあまり注目されなかった。中国天台に関する初めての本格的な英文の研究つまりレオン・ハービッツ教授の *Chih-tai* が出版されたのが一九六二年であった。しかしその後は一九八三年にチャペル教授が諦観の『天台四教儀』の英訳 (*T'ien-tai Buddhism: An Outline of the Fourfold Teachings*) を出版されるまで、二十年あまり天台関係の英文研究書は現れなかった。つまり天台教学は長く北米の仏教研究者の間であまり顧みられなかったのであるが、十年ほど前からそれに対する関心が徐々に高まり、一九八四年にはグローナー教授の最澄の研究、一九八七年年にはスワンソン教授によって編集した *Japanese Journal of Religious Studies* の日本天台についての特集号、さらに一九八九年にはスワンソン教授の中国天台教学の研究などが相継いで公表され、アメリカにおける天台研究は急速に発展した。そして今学会で六人も若い研究者が発表を行なうまでになった。このように北米の天台研究がようやく確立されつつあることは大変喜ばしいことであり、今後ますます天台の研究が盛んになることを期待した

い。

第二に注目したい点は、今回のアメリカ人発表者のペーパーはすべて日本の学者の業績をベースにして作成されたものである、という事である。発表者は皆日本で学んだ経験を持ち、また日本語の論文も自由に読み、常に日本の学界の動向に注目している。パネル終了後の懇親会でゲッツ教授と雑談する機会を

得たが、そこで彼がしきりに強調したのは、日本の学者の研究成果なくして、アメリカの中国仏教・日本仏教の研究は有り得ないであろう、という点であった。そこで改めて私が日本国内で仏教を学ぶ機会を与えられている事に感謝しつつ、日本の仏教学が世界的な責任を担っており、それに答えて行かなければならない使命を持っていることを辯感した。